

論文

新治村の観光発展過程と観光地形成

The Process of Development on Tourism and the Formation of Niiharu Village as a Tourist Destination

溝尾 良隆*

Yoshitaka MIZOO

Niiharu Village as a tourist area was once a local hot-spring location. After 1958, when Lake Akaya appeared as an artificial lake due to the completion of a new dam, Sarugakyo Hot-Spring was changed into a modern resort. After 1985, green tourism was initiated in agriculture areas. Thus, the tourism industry in Niiharu Village has become very important.

Keywords: process of tourism development (観光発展過程)、formation of tourist destination (観光地形成)、hot-spring area (温泉地)、green tourism (農村観光)

はじめに

地域や地域における産業の発展過程の研究は、現状の地域や産業を理解し、将来への展望を考察するうえで重要である。そのために、これまでに地域あるいは地域の産業が外部環境の変化にいかに対応してきたか、その変化に独自に内発的発展をどのように進めてきたのか、あるいは外部民間企業が地域に進出してきたときに、いかに対処してきたのか、そのような過程を評価、分析することで、今後の地域の発展のあるべき方向への示唆が得られるのである。

この種の研究は、地理学において数多く報告されてきた。観光研究に限定しても、山村順次の一連の研究¹⁾、淡野明彦による海岸地域の民宿の研究²⁾、呉羽正昭のスキー場開発と地域との関連³⁾、浦達雄の研究⁴⁾などがあげられる。

本研究の対象地である群馬県新治村に関しては、有末武夫⁵⁾と著者の「群馬県新治村におけるリゾート開発計画とリゾート地域の形成過程」があ

る⁶⁾。著者の研究では、1988年の総合保養地域整備法の施行以降、リゾートの重点整備地区に指定された新治村が、いかにして乱開発を防ぎ、魅力ある地域の形成に努めたかに焦点をあてて分析したものであり、本研究とは一部重なる部分はあるが、その目的とするところは異なる。

すなわち、本研究においては、まず1988年以前に温泉地の形成に影響を与えた要因について分析し、1988年以降については、これまで観光とは縁の薄かった農村地域において観光事業が活発になった背景を調べることにしている。新治村の観光地としての発展過程を、村内の各地区別にとらえてみることに観光レクリエーション施設を通して分析することで、新治村の観光地化の全貌を把握するのが本研究の目的である。

1章 新治村の地域特性

(1) 新治村の概要

新治村は群馬県の北部に位置し、面積182.4km²、

* 立教大学観光学部教授

約84%が山林である。人口は1999年4月1日現在、7,968人であり高齢者人口比率は24.97%である。1995年の国勢調査による産業別人口比率は、第一次産業が16.0%、第二次産業28.6%、第三次産業が55.4%となっている。

年間の入込み観光客は1998年度で115万人、そのうち宿泊者はほぼ3分の1の33.4万人、旅館・民宿を併せた宿泊収容力は約5,000人である。国内外との交流は、保養施設との関係で千葉市と大宮市、海外とは姉妹提携をテキサス州ハンツヴィル市と行なっている。

歴史的には、新治村は中世・近世から越後と関東を結ぶ三国街道の峠の麓に位置し、三国街道沿いの宿駅として発展してきた。三国街道は、奈良時代から平安時代より、当時はまだ三国街道という名こそはなかったが、日本海側と太平洋側との地域を結ぶ要路であった。特に戦国時代には、隣国の越後を支配していた上杉謙信が関八州の制覇に燃え、12回も三国峠を越えたという記録がある。

江戸時代には五街道に次ぐ街道として正式に三国街道として道中奉行の支配下になり、猿ヶ京に関所が置かれた。佐渡金山からの金の輸送、北国大名の参勤交代、越後米の輸送が三国街道を通じて行われた。

明治時代に信越線が、昭和時代に入り上越線が全通したために、三国街道を通じての新潟と関東間相互の物資の輸送は減少したが、上越線の開通により、新治村は東京への近接性は高まり、若山牧水、与謝野晶子ら文人墨客の訪れる地となった。

戦後になると、三国トンネルの完成、乗用車旅行者の増大により、国道17号線沿いという好立地から観光地としての地位を確立した。さらに1982年には上越新幹線駅、1985年には関越高速道のインターチェンジがそれぞれ隣接の月夜野町に設置されて、一層、東京圏からの観光者の誘致を容易とした。関越自動車道を利用すると東京から約120分、新幹線で90分の時間距離にある。

(2) 地区別地域特性

新治村全域を研究対象とするが、図1に示すように新治村は12の大字に分かれ、それぞれが特

徴ある地域特性を有する。現在の国道17号線に沿う永井、相俣、布施、今宿、下新田（今宿、下新田は大字布施に属する）にはかつて宿駅が存在した。永井に本陣、猿ヶ京には関所が設けられた。そのため、これらの地区は昔から街道沿いの宿場町として観光への取り組みは積極的であった。現在では温泉を有する猿ヶ京、相俣、湯宿（新巻の一部）に旅館と民宿が集中する。布施は役場、農協、銀行、郵便局、中学校があり、村行政の中心になっている。17号線に沿う湯宿は、江戸時代には三国街道からはずれていた。新治村の入り口になる師田は水田が多く、農業中心の集落である。

赤谷川に沿う17号線を往来していると気付かない高台の新巻・羽場地域はリンゴ栽培を主とし、向かい合う須川、入須川は野菜栽培を主とするが、ここにおいても近年、リンゴほかの果樹栽培が盛んになっている。須川は、17号線の相俣、布施の間の宿場町であった。

本研究での地域区分としては、大字新巻の小字である湯宿は温泉地という地域特性を有し、小字新巻は農村地帯であるので、両者は区別する。須川、東峰須川、西峰須川を一つの観光地単位として須川平として一括することにする。

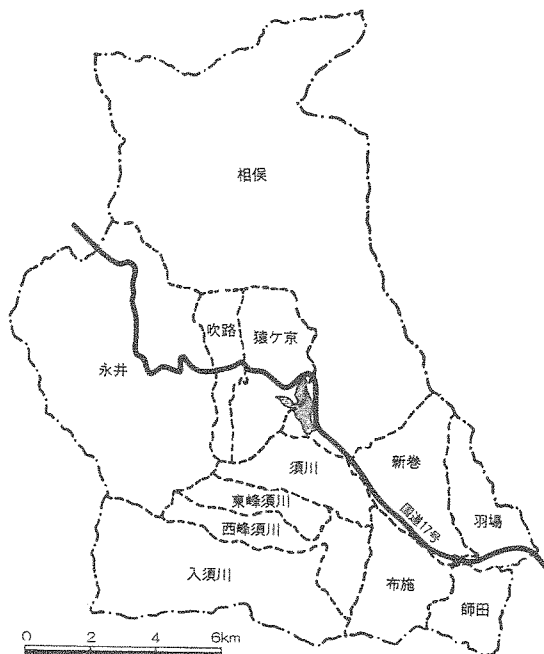


図1 新治村の大字区分

2章 猿ヶ京三国温泉郷地域の発展過程

新治村の5温泉地と民宿地域を総称して、猿ヶ京三国温泉郷とよんでいる。5温泉地とは湯宿、猿ヶ京と、1軒宿の法師、川古、赤岩である。民宿地域は、相俣、布施、猿ヶ京、永井、須川平と、地域は分散する。

1. 5温泉地域

5温泉地の歴史的発展をたどりながら、現状の5温泉地がそれぞれ別個に独特な経営方法を展開している状況を明らかにする。

(1) 湯宿温泉

① 地域特性

赤谷川の左岸、国道17号線に沿う狭あいの地に、7軒の旅館と4つの共同浴場を中心に、1999年現在人口399人の湯宿の集落が存在する。湯宿温泉の南に保健センターと農村改善センターがある。

湯宿の泉温は59.1℃、PH8.0でアルカリ性。温泉水は、約64年かかって湧出しているといわれ、湧出量は自然湧出のため測定していないので不明である。窪湯、竹の湯、松の湯、小滝の湯の4つの共同浴場が、行政単位の組によって、利用・管理がされている。外部の人たちは、原則として入浴はできない。洋品店がいまでも4軒とあるのは、長期宿泊の湯治客による購入があったからである。しかしここでも他地区にスーパーが進出した影響を受け、営業は厳しくなっている。その他に温泉まんじゅう、手打ちそば・うどん、下駄、豆腐を売る特色のある店がある。赤谷川で川釣りが楽しめるほか、薬師まつり、祇園祭りの地区の祭りがある。

「ふるさと対策特別事業」で温泉地内の舗装を石畳に整備をしてから、沿道の人々もみずからの住宅を、統一ある地区の景観を構成するように配慮してきている。地区は「生活のある湯の町づくり」を目指している。環境庁の「ふれあい・やすらぎ温泉地」の指定を受けている。

② 温泉地の歴史的変遷

仁寿年間(851-854年)の開湯と伝えられる。須川村の弘須(こうず)法師が湯宿(今の湯本館)の岩屋に21日間籠り、大乘妙典をよんで満願の

日になると、目の前から湯がふきだし、薬湯を授かったといわれる。その地に現在でも湯宿の源泉があり、地区の名称にもなっている。

戦国時代にすでに湯治場になっていた。江戸時代、沼田初代城主真田信之が戦陣の疲れを癒して以来、真田の城主2代目から4代目までがこの地に下屋敷を構える。4代目伊賀守信正は痔が治ったことから、いま温泉薬師である如来堂を建立し、湯守も置いて、湯宿は湯治場としての体裁が整った。

三国街道の宿場は、相俣の次が須川、そして布施となり、湯宿を避けている。これは、湯宿は温泉があるので、宿場が歓楽的になるので意識的にはずしたという説があるが、湯宿の北にある赤岩が赤谷川にまでせりだしているため、通行を不可能にしていたというのが正しいのではないだろうか⁷⁾。しかし温泉のある湯宿への客がふえるにつれ、湯宿と宿場町須川との間で客の奪い合いが起きてきた。

明治時代には湯宿の旅籠は四十数軒になり、共同浴場を中心に集落が形成された。明治時代末から大正にかけて赤岩を切り崩して新道が湯宿のある赤谷川沿いにできると、須川宿が廃れてくる。大正時代初期には酢酸の工場が湯宿にできていた。1893(明治26)年に信越線が全通すると、新潟への三国越えの人々は減り、湯宿の旅籠数は大幅に減少した。

それでも戦前には赤谷川の対岸に製糸工場もあり栄え、赤谷湖ができ、猿ヶ京が繁栄する1960年代までは、湯宿が、猿ヶ京より多くの宿泊者を集めていた。理由は、

ア、バスの終点が湯宿だった

イ、上越線から近かった

ウ、宿場町の町並みができていた

からである。当時の村の入湯税の半分が湯宿、猿ヶ京が2.5割、残りが法師・川古であったといわれる⁸⁾。村の商業の中心は湯宿で、須川、新巻、布施から、年寄りや弁当を持って風呂に入りきたり、若者も夜遊びに湯宿にきていたほどある。1970年頃までは活気はあったが、その後、苗場スキー場の好影響を受けた猿ヶ京が規模を拡大して、湯宿は格差を広げられることになる。湯宿は

いまではもとの静かな温泉地になった。

③旅館別経営・利用者特性

現在ある7軒の旅館のうち、湯本館、満寿屋、常盤屋、大滝屋、太陽館は、一部に代替りしている旅館はあるが、江戸時代からの営業しているという古い歴史をもつ旅館である。金田屋は明治の初め、みやま荘は1967年に開業した旅館である。満寿屋、常盤屋、常盤屋はそれぞれが外戚関係にあり、みやま荘は常盤屋の親戚といったように、地域の縁故の強い人々によって旅館は経営されている。

客室規模をみると、14-18室の間に4軒、5-9室に3軒と、いずれも小規模である。昔は、どの旅館も2週間から1週間の長期滞在が多かった。みやま荘と大滝屋はいまでも、相部屋に長期滞在者を泊めている。満寿屋、常盤屋も1週間の滞在者が多い。この4軒は低料金を設定している。大滝屋は3,500円から、常盤屋は5,000円から、みやま荘は5,000~6,500円であるが、長期滞在者には4,500円からとなっている。満寿屋は、ご飯と味噌汁だけ出して、おかずはお客が持参という半自炊の形態で税込みで3,500円である。残りの太陽館、湯本館、金田屋が一般観光客に対応している。湯宿の中核となる湯元の湯本館では2-3泊が多く、1泊宴会型は少なく、連泊で、保養、療養の目的が多い。したがって、景気の波の影響は受けにくい。湯本館の客の発地はおおよそ県内客が4割、埼玉、東京が各3割となっている。

(2) 猿ヶ京温泉

①猿ヶ京の由来

802(延暦21)年、この地の利を生かした開拓が行われ、この地を宮野と称した。1307(貞治2)年に宮野村を猿ヶ京村と改称したが、猿ヶ京の名の起りに関しては確証たる文書はない。上杉謙信が関八州を入手する瑞兆の夢をみたその日が庚申、申の日ということで、申ヶ京と改めたという逸話がある。しかし上杉謙信がこの地に入った1560(永禄3)年は、宮野村を猿ヶ京村と改称した1307(貞治2)年⁹⁾から250年後になり、年代が合致しない。

1922(大正11)年に猿ヶ京を訪れた歌人若山

牧水は『みなかみ紀行』¹⁰⁾の中で、「参謀本部五萬分の一「四萬」の部を開いて見給へ。(略)其拠に「猿ヶ京村」といふ不思議な名の部落のあるのを見るであろう。」と述べて、特色ある猿ヶ京地名に興味を惹かれている。

②江戸時代¹¹⁾一秘湯の湯島温泉

猿ヶ京温泉の源泉は、猿ヶ京湯の町から急坂を下りきった、湖中ダムの脇にある。赤谷川の川底と赤谷川の「中の島」から湧きだしている。その「中の島」を「湯の島」というようになり、付近一帯を湯島河原と呼び、温泉地は湯島温泉とよばれた。

温泉がいつから利用されていたか定かでないが、湯島温泉が文書に残されているのは、江戸中期の1776(安永5)年、猿ヶ京、永井、吹路、合瀬の4か村195人が湯島河原に湯小屋を作りたいということを村役人に願いでたものである。この頃の湯島温泉は村人か近くの人が利用する程度で、村人以外が利用するには近くの関所で二重改めを必要としたため利用は少なく、江戸時代には世に知られていない温泉であった。1689(元禄2)年に許可が出たという記録が、「吾妻郡村誌」にあるが¹²⁾、この事実は確認できない。

③1968年~1911年(明治時代)一生井温泉の誕生

1969(明治2)年に猿ヶ京関所が廃止されても地の利が悪い湯島温泉は、通行者に利用されることもなかった。当時三国街道は、今は赤谷湖の湖底となった生井部落を通っていて、生井部落は関所の手前ということもあって、この付近の中心として猿ヶ京郵便局や巡査駐在所が置かれた。旅館・水車小屋の農家など10数軒が集まり、猿ヶ京、相俣を含めた周辺地域の中心となっていた。ここに浴場だけで宿舎が無い笹の湯が存在していた。1973(明治6)年におよそ500-600人¹³⁾、1976(明治9)年に430名の浴客があったという記録が残る。

1975(明治8)年に1キロ先の湯島河原の湯を引く掘削工事を行い、1890(明治23)年頃完成した。通行客が自由に利用できる温泉が出現し、笹の湯とともに一般的には生井温泉と呼ばれた。湯は村有で猿ヶ京の人たちも無料で利用できた。

ただちに、島屋、清水屋、北越屋、吉野屋が営業を開始した。島屋、清水屋には温泉が引かれていた。

④1912年～1925年（大正時代）一湯島温泉へ移行

この地を揺るがす、後世にいわれる生井坂事件が起きる。学校制度の改革により、1912（明治末）年から小学校増築の必要が生じたが資金がなかった。そこで住民は県道生井坂の工事を請け負って利益を生み出すことにしたが、かえって赤字をだしてしまった。その穴埋めに村の山林や畑を競売に出したが足りず、裁判沙汰になる。1915（大正4）年に猿ヶ京村所有の温泉を島屋と清水屋に売却して村の借金を払うことができたが、長い間、村民共有であった湯の権利が、個人所有になってしまった。この一連の事件を生井坂事件という。

しかしその間に1913（大正2）年、赤谷川に相生橋が架かり、わざわざ谷間の急坂をたどる生井まで通る通行人は少なくなり、生井の集落は寂れていった。1919（大正8）年には郵便局や駐在所も猿ヶ京に移り、民家も順次猿ヶ京に越していった。利用者が減少したので、せっかく温泉を手に入れた島屋は、1918（大正7）年に生井の建物を二つに分けて移築して島屋と湯島館の2軒を湯島温泉で開業した。清水屋も湯島温泉で営業を始めた。新たに湯島に湯源を掘り当て、後の見晴館となる田村氏が湯小屋を建てて住んでいた。しかしここも猿ヶ京から1キロも離れた街道からはずれた谷間の立地の悪さから、浴客は少なく経営ははかばかしくなかった。1919（大正8）年に3軒で706人の浴客であった。しかし当時は宿屋専業でなくても、農業と山仕事で十分に食べていたのである。

⑤1926～1954年—4軒時代

1885（明治18）年から相楽氏が営業していた生井林温泉（生井温泉と同一）、別名笹の湯を1927年に東海林鉦吉が買収して、相生橋近くで相生館を開業した。1928年には個人所有の湯島温泉の権利を沼田市の財閥桑原恵助が買取り、桑原館を開業した。島屋、湯島館、清水屋は徐々に解体して、桑原館は新築、増築を繰り返しながら、

規模を拡大して、湯島温泉の発展に寄与した。桑原館は1946年に持谷長一郎が買収して猿ヶ京ホテルと名を改めた。1933年に湯島で生津義登が長生館を開業している。すでに大正時代に開業した見晴館に、相生館、猿ヶ京ホテル、長生館が加わり、この4軒が相俣ダムにより沈むまで親密な共存共栄を図りながら、猿ヶ京温泉の4軒時代を築いていった。

⑥1955年～1974年—猿ヶ京温泉黄金時代

1952年から計画調査に入った相俣ダムは1955年末に堰堤が完成し、1958年から湛水を開始し、赤谷湖が出来上がった。ここに生井部落は消滅し、旅館4軒を含む29戸、小学校、中学校が高台の地に移転した。

湯島の3源泉と笹の湯の源泉すべてが湖底に沈んだのを機会に、4軒が共同の源泉1本として、それぞれが旅館を新設したのは1955年のことである。開湯以来、猿ヶ京のひとたちに無料で湯に入れるようにしていた。それは、1914（大正3）年まで湯島温泉は村の共有であったことや、湯導管が他人の土地を通るため土地借地料の代わりとしていたからである。1958年に赤谷湖が出現してから、猿ヶ京温泉の名がつけられ、猿ヶ京温泉が誕生した。

さらに、車では吹路までしかいけなかった永井止まりの国道が1959（昭和34）年に三国トンネルの完成で、新潟方面と関東地方が結ばれることになり、猿ヶ京温泉は車時代の到来とともに、史上空前の賑わいをみせることになった。苗場スキー場も1961年冬には開業し、猿ヶ京温泉泊のスキー客も増加した。

旅館も1962年に5軒の旅館が新規開業したのを皮切りに、1966年にかけてさらに4軒が開業した。これにあわせて源泉も次々と掘られた。既存の旅館も高層化し、1961年には猿ヶ京ホテルと相生館が、全国初の眺望権をめぐる裁判も行われほどであった。

1950年から1965年までの15年間は猿ヶ京温泉の黄金時代で、みやげ物屋、寿司屋、射的屋、スマートボール屋、飲み屋、芸妓屋、ストリップ劇場など、温泉地らしい街区が形成され、猿ヶ京温泉は芸者の多い歓楽型温泉地として一時は名を馳

せた。

⑦1965年～現在一新旧交替の時代

日本の各観光地は、1974年末にオイルショックを迎え、経済的不況とともに、ガソリンの供給困難から観光者が減少するとともに、遠出や宿泊の旅行を控えたために、多大な影響を受けた。一方で、歓楽型温泉地は、どこにも代替性があるため他地域にも同種の温泉地が出てきて競争が激化したり、観光者も都市において歓楽気分を満たせることになり、観光地にそのような嗜好を求めなくなってきた。猿ヶ京温泉の売り物も陳腐化してきた。

他方、1982年に上越新幹線の開通、1985年に関越自動車道の開通は、新治村観光にマイナスになるのではといった懸念もあったが、むしろプラスに作用した。国道の通過交通が減少したことと、新幹線駅、高速道のインターチェンジからさほど遠くないからである。内部においては、民宿から旅館業に転換を遂げたり、規模を拡大せずに質的な向上を目指した旅館が目立った。しかしその一方で新しい時代の変化に対応できず旅館業に見切りをつけたり、倒産に追い込まれたりした旅館も現れた。特に、猿ヶ京をリードしてきた老舗の旅館が2軒倒産したり、規模の大きな旅館が経営不振で身売りしたりした。理由は、経営者の経営努力がなかったこと、保証人として協力していた旅館が潰れ、その負債を背負い込み心労で経営者が亡くなったこと、高齢の経営者が亡くなり後継者がいなかったことなど、さまざまである。

⑧三旅館の特色ある経営

旅館業の盛衰が激しい猿ヶ京で、堅実な経営を続けているタイプの異なる3旅館の経営姿勢をヒアリングを通じて以下にまとめる。

猿ヶ京ホテルは創業は戦前で、規模・質ともに猿ヶ京を代表する旅館である。老舗に胡座をかくことなく、1982年に改築して、客室数も81室から70室に減らして高級路線を敷き、ロビー、風呂を直して一新した。さらに1989年にロビーを手直しするとともに、客室を66室に減らした。旅館内に豆腐とパンの工場を設けて、おいしく、かつ健康な料理を提供している。旅館では夕食後に民話の語りを提供するとともに、独自に文部省

登録の文学館を併設し運営している。

ライフケア猿ヶ京は、低料金にもかかわらず、値段の割に食事、風呂、人的サービスもよいことから、定員稼働率が高い経営をしている。旅館を開業する前は、高齢化時代が到来するので、年寄り用マンションを販売したが売れなかったもので、高齢者に照準を合わせた旅館を、1985年に開業した。もともと苗場で18年間民宿を経営していたので、宿泊業の経営には熟知していた。

生寿園は1977年に開業。料金は、猿ヶ京ホテルとライフケア猿ヶ京の間である。経営者は以前民間企業で働いていたが、当初もっと早い開業予定であった新幹線も高速道路に合わせて、旅館業を営むことになった。8室で開業して、1987年に5室を増設、98年に4室増室して、現在は17室になっている。

(3) 法師温泉・長寿館

①歴史

法師温泉・長寿館は、猿ヶ京温泉からさらにバスで25分、西川上流部の標高800mの位置する一軒宿である。泉温は43℃、無色透明、カルシウム、ナトリウム硫酸塩泉の温泉である。

温泉の発見を文献や物証で裏付けることはできないが、1200年前、弘法大師の巡錫の折に発見されたというほど古く、昔から「法師の湯」と呼ばれていた。1968(明治1)年、坂上田村麻呂の子孫が所有していた法師温泉の権利を買取った。2代目岡本貢は、上越線の開通に功があり、上越線開祖の人といわれ、上越線石打駅に功労を記念した銅像がある。1895(明治28)年に完成した和洋折衷の大浴場は、優れた窓のデザインや、杉桧皮の屋根の美しさを今日までに伝えるが、設計は、岡本貢と上越線の開通へ向けて地質調査などを担当した英国人技師がスケッチしたものといわれる¹⁴⁾。1877(明治10)年頃の永井村の資料には、年に2千人の浴客があったとある。1920年代後半には文壇人の避暑地として栄え、高村光太郎、与謝野晶子、若山牧水、川端康成らが訪れている。この頃は5軒ほどの民家があり、長寿館の湯を引いて営業していた旅館も4軒あったが、度重なる水害でこの地を離れて、長寿館1軒が残る

だけとなった。

1954年に電気が灯り、1965年ころになり冬季間、除雪されるようになった。しかし1965年以降は、歓楽的雰囲気求めて猿ヶ京温泉に訪れる人が多くなったり、国道が永井宿上を通るようになり、法師温泉の経営の苦しい時期は長く続いた。長寿館の基礎を築いた6代目岡本隆造は「一泉一戸」の経営を貫いたが、「猿ヶ京に手伝いに行ったり、お金を借りに行っても相手にされないことがあった」と苦しい時代のことを筆者に語ったことがある。しかし世の中の動きに奇をてらわない精神が、国鉄のフルムーン旅行のポスターとなって、全国に法師温泉の名を馳せることになった。今日では、法師温泉のよさを理解する人がふえ、新治村でよい経営をしている旅館の一つである。現在の当主は岡本興太郎で7代目になる。

②旅館の新築・改装

本館は1975（明治8）年に建てられた。12室をもつ湯治棟、旧館は1930年、別館10室が1940年の建築である。経営が安定してから、あたらしい客層に対応するために、旅館の質的向上を図り、1972年に新館10室を完成。1976年に本館を改装。1978年には高級施設として薫山荘6室をつくった。1980年に女性専用風呂を造る。しかし旅館の目玉である大浴場は現在も混浴である。1989年に旧館を壊して法隆館をつくる。現在の客室数は39、収容力は140名である。

法師温泉は1軒宿ということもあり、時代に合わせて、そのときどきの客層に対応して、建物の改築や新築をしてきた。しかし、いつでも湯治客を大切にして湯治客用の部屋と料金は提供している。

③利用の実態

誘致圏は広く全国におよぶ。とくに、県内よりも東京からの利用者がもっとも多い。宿泊数はバブル期の1991年に33千人のピークを迎えたが、1998年には宿泊者は22千人に落ち込んでいる。法師温泉は入浴したいという利用者も多く、1998年には昼食の休憩人数は8,141人、入浴のみは15,093人にのぼる。月別宿泊者数は、ピークの10月で12.1%、ボトムの2月で6.0%と、冬季がやや少なくなるだけで、年間通じて安定している。

ピーク時には一日120人、平日でも30～50人の利用が常時ある。家族連れ、カップル、一人客など、少人数の客が多い。最近では、外国の雑誌に紹介されたり、在日外国大使館の推薦があったりして、外国人の客もふえている。

(4) 川古温泉

①概要

室町時代に開湯という古い温泉である。猿ヶ京を扇の要にすると、法師温泉と対極の赤谷川の谷に川古温泉はある。ほう硝石膏泉の38度とややぬるい湯に長時間入る。冷えないようにバスタオルを腹に巻いて入っている人もいる。一日6～8時間、7～10日間滞在すると、神経痛、リウマチ、むちうち症に効くと評判が高い。

②建物の改築

息子に経営を引き継ぐのを機会に、1985年に1軒を改築して峰旅館として、昼食中心の経営にする。昔からの湯治の馴染みの客は親しみある峰旅館を希望するので、この人たちの宿泊は受け入れることにして、両親が経営する。もう1軒は老朽化していた濱屋旅館を、1989年に改築し、息子が経営する。これまでの35室を20室に改築して、4室を高級にし、16室を一般の保養客を対象とした。ただし、あくまで保養を目的として、団体宴会型の旅館は指向しない。

③宿泊者特性

常連の客とその人たちによる口コミで訪れる人が多く、宣伝はほとんどしていない。宿泊は4泊以上を原則とする。1週間から10日の滞在が多く、病気の人が多い。10日以上滞在する人は仕事を引退した人である。長期滞在者にはふつうの家庭料理を出す。長期滞在者は、部屋の稼働率が上がり、手間がかからないのでよいという。3食で8千円である。

2食で1泊8千円となる濱屋旅館のほうは、2～3泊者が多い。高級の4室は1万5千円である。料理も普通の旅館料理になる。準備の都合もあり、予約を原則とする。一般旅行者は紅葉の時期や週末、連休に集中する。ただし年末年始には、湯治の常連客が早めに予約するので、一般客はなかなか泊まらない。

交通が便利になってからは、遠くからの客がふえている。東京、埼玉、群馬の順に多い。

(5) 赤岩温泉・誠法館

湯宿温泉に隣接するが、温泉は地下400mから湧出し、泉温は30度、泉質は緑ばん泉でリュウマチによく、湯宿温泉と泉質は異なる。1軒宿とはいうものの、国道17号に面しているため、法師温泉と川古温泉のように、自然が豊かという雰囲気ではない。この付近は昔から赤岩景といわれ、背後の岩が赤味を帯びていることから温泉の名がある。

温泉を掘削して1965年から旅館業を開始した。1960年代から80年代までは、東京や埼玉から1-3泊の湯治的な宿泊者が多かったが、最近は宿泊者がめっきり減っている。その原因の第一は、旅館経営の30年周期にあたっているからだという。事業を開始して30年経つと、昔から常連の客が高齢化したり、亡くなったりして、来なくなる。この時期に、いまちょうどあたっていることを主人はあげている。

その他に、全国の市町村が日帰りの温泉施設をつくったので、高齢者はわざわざ遠くまで泊まりに来ないこと、隣接の湯宿温泉をはじめ大型旅館も値引きをしているため、この旅館のように6千円の低料金の魅力がなくなってしまったのである。

国道に面しているため環境は良くないため、環境のよい、背後の山に建物を移設したいが、山は自分の所有にもかかわらず、保安林の指定をうけているため、木の伐採もできず、移設が不可能である。以上のように自らでは解決できない課題も多く、今後の旅館経営の方向に戸惑いをみせている。

11室の部屋を持つが、子供たちに生活のための部屋を提供したため、8室が宿泊者用である。

2. 猿ヶ京地区における民宿の発達

(1) 新治村における民宿開業の背景

1961年に三国峠を挟んだ新潟県側に開業した国土計画（現在のコクド）の苗場スキー場とともに、新治村の民宿ははじめた。当時、苗場スキー

一場へは、上越線湯沢駅からバスに乗り換えて40分を要していくか、国道17号を貸切りバスのツアーに加わっていくかであった。まだ乗用車の利用はほとんどみられなかった。しかしスキー場周辺に宿泊施設がなかったこともあるが、国道17号が渋滞して、土曜日午後に出発しても、苗場スキー場に到達するのは困難であった。

そのため峠の手前の群馬県側の法師温泉に多くの宿泊客を泊めていたが、それでも収容できず、法師温泉の番頭であった高橋氏が東京の第一観光と提携して、1962年頃から猿ヶ京、永井、吹路の農家に泊めていた。猿ヶ京の旅館はすでに整備されていたが、温泉付きで料金が高いため、民宿が好まれた。この頃、バスが20台も着くと、皆で提灯を持って出迎えた。これが民宿事業に取組んだ背景である。

当時50軒近くあった民宿が、現在、旅館に転業したり、廃業したりして、民宿は23軒に減少している。それは苗場スキー場周辺にペンション・民宿やホテル、リゾートマンションなどの宿泊施設が整備されたことや、道路の整備が進み、苗場までの到達時間が短縮されたことによる。

永井地区の民宿は苗場のスキー客が来なくなったことに加えて、温泉のある猿ヶ京の民宿に客を奪われ、客足は激減した。それでも1984年にはまだ8軒の民宿はあったが、いまでは2軒、それも正月に数組が訪れる程度である。吹路地区には最盛期14軒の民宿があったが、その頃でも苗場のスキー客に対応する冬季のみ営業の民宿が11軒であった。スキー客がいなくなると、温泉のない弱みがあらわれて、1984年には2軒あった民宿が、いまではすべて廃業となった。これに対して相俣は猿ヶ京の手前の集落で国道に面しており、温泉もあるとあって民宿4軒が営業を続けている。

現状では、猿ヶ京に14軒、永井に2軒、相俣に4軒、須川平に2軒、布施に1軒となっている。民宿が減少しているなかで、「たくみの里」の人氣とともに、須川平、布施では新規の開業がみられる。村の観光パンフレットで民宿に記載されている「ファミリーリオ新治」は、本研究では民宿には含めない。

ここでは民宿が集積しており、一時全国的に注目を浴びた体育民宿村を展開した猿ヶ京地区の民宿に焦点をあてて分析する。

(2) 猿ヶ京体育民宿村

① 体育民宿村の開業以前

前述の高橋氏に依頼されて各地区の民宿の手配したのが、後の民宿「のんき屋」を経営する笛木善宣氏であった。「のんき屋」が猿ヶ京の民宿のリーダーとなっていくのである。しかし当初は笛木家の自宅はわずか6畳・8畳の広さであったから、運転手だけを泊めていた。どの家も、自分たちの部屋をほとんど開放して、家族は土間などに寝泊まりしている状態であった。民宿許可をとらずに営業している状況に、旅館側から苦情が出て、農家の人たちも民宿業の認可をとるようになった。1963年に10軒の民宿が開業。「のんき屋」も当時は「山麓食堂」であったが、1965年に新築して4畳半の5部屋、6畳の1部屋を客に提供する民宿で再出発した。

さらに高橋氏のすすめで、夏に学生を受け入れることになった。民宿の多くは反対したが、「のんき屋」を含めて4軒でスタートした。当時、わが国の学生民宿は受験勉強の学生が夏に来て、長期に滞在した。猿ヶ京の民宿も夏に2～3人の学生が受験勉強に来るようになった。

② 体育民宿村の開業

民宿に来ていた高校の先生が、東京オリンピック終了後のスポーツブームには、学生用に室内の体育がよいと、体育民宿をつくることをすすめた。「のんき屋」はその方向で事業をすすめることにしたが、900万円の売上げの民宿が、5千万円の体育館をつくるのだから、銀行は金を貸してくれなかった。農協が、新しい試みとしてどう発展するか実験的なモデル民宿として様子をみようということで、資金を融通してくれた。1966年当時、全国の民宿で最大の120m²の体育館をつくった。反響は大きく、すすめた高校の先生も宣伝してくれて、3月にはすでに、6月から10月までの5か月間が満員となった。NHKも珍しい民宿のタイプから宣伝した¹⁵⁾。

体育館の使用上、利用者同士の競合が起きるの

で、1団体100名以内は泊めないことにした。6～7月、9月が大学生、8月が高校生、10月が社会人と月別利用がうまく分かれた。1969年に卓球台、バーベル、ピアノ、オルガンをそろえた第二音楽体育館(85m²)を増築。さらに体育館を一つつくり、「のんき屋」1軒で3つの体育館を所有した。「のんき屋」の成功に刺激されて、他の民宿も体育館の建設に乗り出し、猿ヶ京民宿17軒のうち10軒が体育館をもつようになった。ここに三国体育民宿村が誕生した。

1972年11月29日の朝日新聞は、「体育民宿村づくり」へと題して、つぎのように伝えている。

大学運動部を民宿へ誘致し、現在8体育館があり、来夏は10館になる予定である。他に弓道場1、テニスコート1がある。三国民宿は48軒になっている。シーズン中には、村有グラウンド、小中学校のグラウンド、体育館を開放。今シーズンは4万人が入った。

1975年6月9日のスポーツ新聞(新聞名、不明)の記事では、

三国民宿は46軒、猿ヶ京地区に17軒があり、そのうち10軒の民宿が体育館をもつ。うち1軒は3館ももつので、体育館は12になる。33×30mの最大の体育館で、使用料一日6千円、以下、3千円、1千円の順になる。民宿が2食つき2300円。全民宿が温泉をもつのがよく、76軒の戸狩民宿(長野県)でも体育館は8つにすぎない

と伝える。このように、当時の猿ヶ京の体育民宿村は、全国的にもよく知られ、スキーや海水浴のできない地域が、体育館や運動場を整備して、夏の学生を滞在させるはしりとなった。スキー場地域においても、グリーンシーズン対策として、同様の整備が進められたのであった。

現在の14軒のうち、5軒が苗場スキー場に関係のない1965年度以降の開業である。

(3) 1980年以降、現在まで

国道が整備され、苗場スキー場の宿泊施設の収容が増すにつれ、冬季のスキー客は激減した。1980年頃には、苗場のスキー客はほとんどなくなった。7～8月には学生合宿はまだみられてい

た。冬季対策として温泉がどの民宿にも引かれていたので、老人会や農家の人たちを誘客した。1982、3年頃、人工芝のあるゲートボール場を最初につくったのも「のんき屋」であった。有末武夫によれば¹⁶⁾、1985年には、猿ヶ京民宿は10軒の民宿が体育館をもつほかに、4軒はテニスコート、7軒がゲートボール・コートをもっていた。民宿の規模は、50名以上が7軒、30-49名が5軒、29名以下が4軒であり、「のんき屋」が最大で16室85人、「しんでん」が11室70名で続いた。

まだ異常ともいえる定員稼働率88%のまま、高齢のため1988年2月に「のんき屋」の経営者は事業から手を引き、民宿名は残したまま、他の人に譲渡したが、別人による営業は不振となり、1997年にさらに他の民宿は身売りされ、「のんき屋」の看板はなくなった。

苗場スキー場とは関係のない時代に開業した「藤屋」の例をみることにする。スキーが終わりつつあるが、依然として民宿の最盛期である1965年に開業した「藤屋」は、体育館1つから始まり、1972年に建物を新築してさらに体育館を一つふやし、その後、前述の「のんき屋」の体育館2つを買取り、現在4つの体育館を使用している。7～9月には学生の合宿が多く、年間の60%の客をこの3か月で集めている。学生は、バスケット、卓球、バドミントン、柔剣道など多様な使われかたをしており、4泊の利用が多い。他の月では、老人会のゲートボール、湯治、忘年会、新年会の利用である。13室で50人収容、合宿のときは80人まで収容する。学生は3食で5800円、その他の客は6500円である。

1998年現在、14軒の民宿のうち、7軒が体育館、5軒がゲートボール場をもち、「藤屋」同様、依然として学生や高齢者の利用がある。

3章 農村地域の観光事業

1. 農業の停滞と観光リンゴ園の拡大

赤谷川沿いを走る国道17号線からは見るのできない、左右の高台にある広々とした新巻平と須川平の大きな空間が新治村農業の中心地である。新治村の養蚕はかつて全農家の57%が営み、耕地面積の41%が桑畑であった。しかし1970年

に1,065haあった耕地面積が1995年に638haに減少している。主要産業であった養蚕が、1960年代から生糸の需要の減少と国際価格に押されて衰退したため、桑園は荒廃しはじめた。すでに桑園面積が減少していた1980年と1995年とを比較しても、桑園面積は6割の減少になっている。

個々の農家は、市場の近さもあって、市場で有利なトマト、キュウリ、シクラメンの栽培に取組んでいるが、それが産地形成になるほどの規模ではない。1980年と1995年の間に果樹園面積は6割の増加をみている。果樹園のなかでも規模の大きいのがリンゴ栽培である。リンゴ栽培は1960年代前半に構造改善事業で規模の拡大を図ったが、販路が難しく経営は厳しかった。しかし、1970年代に入ってから観光リンゴ園に取り組み、これが軌道にのり、1987年から、わい化栽培方式による新植がされ、年々、リンゴ栽培に取組む農家がふえている。1996年度から新たに果樹栽培をするときには、県と村からそれぞれ3分の1の補助が設けられたので、あらたにブドウとサクラランボの栽培が試みられている。リンゴ栽培は栽培面積の拡大とともに最近になり一部市場出荷もみられるが、ほとんどが、観光客相手のもぎ取り、贈答用、宅配便による特定消費者への発送と、新治村を訪れる旅行者との直接販売で終始している。

果樹栽培は、須川平、新巻平共通であるが、以下においては、農業地域の観光化の状況を、須川平、入須川、新巻平の三地区でみていくことにする。

2. 須川平

「野仏めぐり」と「たくみの里」については、溝尾はすでに研究発表しているが¹⁷⁾、須川の観光の歴史として除くわけにはいかないので、簡単にふれる。

1978年に野仏めぐりは始まった。県の重要文化財である泰寧寺、大庄屋役宅を核にして、須川平の田畑に点在する野仏を結んだ8.5キロのコースが野仏めぐりである。評判はよく年間に4万人ほどが訪れたが、野仏の所在がわかりにくい、コースが長い、野菜を購入したいという問題が残さ

れた。

1985年から、野仏のルート上に休憩施設やルートの変化をもたせるために、4集落に1つずつの「たくみの家」4軒を配置した。須川地区の入り口に村単独の物産販売施設「香りの家」を設けるとともに、須川資料館も開館した。「たくみの里」が人気を集めるにしたがって、村内外から「たくみ」の希望者がふえ、1999年現在、「たくみの家」は19軒・20件の「たくみの家」に増加している。1996年には、大規模な駐車場と後述する農村公園公社による豊楽館ができ、そば打ち体験の人気とともに、須川の中核的な施設としての役割を果たしている。

観光客の増加とともに、喫茶やそばを提供する店が増加してきた。1999年9月現在の調査では、その数は15軒にのぼっている。このうち14軒はまったく新規に開業した店である。そのほかに、観光関連の事業としては、1995年から観光馬車が2台運行されている。

1998年にJ R東日本が管轄内で展開している長期滞在施設「ファミリーオ新治」がこの地に開業した。J R東日本が、家族やグループで長期滞在できる施設としてのファミリーオとツインの部屋を基本に観光目的を主体に駅舎および駅周辺に立地するフォルクローロの二種類で全国展開している一環である。当地にはそれ以前に小規模な民宿が2軒すでに存在していた。1軒は農園民宿を特色にして1989年に開業。もう1軒はペンションとレストラン兼営である。ファミリーオ新治は収容力80名で、朝食付宿泊施設で、農家の農産物を提供する施設も設けて、地区の農業との連係を特色としている。施設の水準は高く、料金も低廉であるが、まだ連泊は少なく、定員稼働率は10%をわずかに超えるのみで、経営は楽ではない。しかし新治村にとって、J R東日本が管轄内において、新治村を宣伝してくれる効果は大きい。

新しい動きとしては、1995年度に建設省の「歴史国道」整備事業の対象地区として須川宿が選定された。本事業により、須川宿のアスファルト道路が、歩きやすい舗装にかえられるとともに、景観を壊している電線・電柱を集落の背後に移設す

表1 「たくみの里」の職人出身地

竣工年：西暦1900年代

たくみの家	竣工年	出身	たくみの家	竣工年	出身
木工の家	86	地域	急須の家	95	村内
竹細工の家	87	地域	七宝焼の家	95	村外
陶芸石工の家	87	地域	マッチ絵の家	96	村外
わら細工の家	88	地域	鈴の家	97	村内
和紙の家	90	村内	ガラスの家	98	村外
石画の家	91	村外	布遊びの家	98	村外
くるみの家	91	村外	おしばなの家	98	村内
木織りの家	92	村外	うるしの家*	98	村外
おめんの家	94	地域	染の家*	98	村外
藍染の家	94	地域	盆栽の家	99	村外

注：1) 地域とは、笠原、須川、東峰、谷地の集落。

村内とは、地域を除いた村内。

2) *1軒の家に、二人のたくみが、別々に技を披露。

資料：新治村企画観光課にヒアリングして筆者が作成。

ることと、クランク状に曲がり、集落内を通る県道が移設されることになる。今後、歩行者優先の景観のよい須川宿に様変わりされるだろう。

3. 入須川

入須川は、須川の奥に位置する。須川よりも傾斜地の多い山間地域であるため、農業も不振で過疎化が進行していた。観光事業としては、川手山森林公園がすでに1977年から開業しているが、入須川集落とは離れた山地にあり、夏季に限定されるうえに、アプローチ道路が狭く、施設が陳腐化しているので、利用者も少ない。

当地域を活気づけ、当地域人々に地域振興への動機づけとなったのが1996年の温泉施設「遊神館」の開業である。温泉は入須川の奥にあった温泉施設としては機能していなかった奥平温泉を村

が買い取って、集落内まで引湯しているものである。農村公園公社の経営であるが、年間に15万人前後の入湯客があり、地域の人々が遊神館で働いているほか、駐車場に農産物販売施設を出している。

当地区には1996年から民間が営業している温泉つきの「いwana広場」と川手山森林公園の隣接地で営業している外部民間のパラグライダー場、1998年には地域の越越漁協が整備し経営している渓流釣り場「越越公園」がある。

新しい動きとして当地区が1998年に環境庁から「にいほる自然学校」の指定を受けた。これは自然豊かな農村地域において、キャンプ、ネイチャーウォーク、ハイキングをしたりして、自然体験、生活体験を味わうというものである。まだ開始したばかりで、常駐の人もいないし、宣伝力もなく軌道にのってはいない。

4. 新巻平

ここでは小字の新巻と羽場を含めて新巻平と呼ぶが、新巻平には、1981年にゴルフ場、1983年に群馬サイクルスポーツセンターが開業しているが、道路体系との関連から、施設の開業が新巻平の農家の人たちに影響を与えることはなかった。

新巻平は現在観光リング園が拡大している。新巻平におけるリング栽培の導入は1958年頃からと早かった。1967年の農業構造改善事業で規模を拡大したが、当時、販路の開拓が難しく、村内や隣県の湯沢町まででかけたり、学校給食での使用をお願いしたりして、苦しい販売努力が続いた。観光リング園としてリング狩りが1970年代に入ってから始まり、リング販売は軌道にのってきた。1987年からは、わい化栽培方式による新植がされ、年々のリング栽培に取組む農家がふえている。1999年現在、観光リング園は新巻17軒、羽場に2軒、須川に4軒、布施に3軒となっている。

この地区に新しい中核施設として「フルーツパーク」が導入された。当施設は、加温ハウスを含めて、桜桃、ぶどう、ネクタリン、和梨、西洋梨、ブルーベリー、すもも、桃、りんごの9種類の果樹を4.9haの地に栽培して、観光客の楽しみに供しようとするものである。果樹栽培地の反対側に、

駐車場、緑地広場、農産加工室、加工体験実習室、多目的ホールを備えた施設を建設する。1998年から工事に着手し、99年度中に完成予定である。

5 農業の振興と農村地域への観光事業の導入

(1) 行政の取り組み

上記のように、さまざまな果樹の導入によって、直接的な農業振興を行政は展開してきたが、農業と観光事業との連携を密接にしたのは、「たくみの里」の成功とその後の農村公園構想の確立とその事業を具体的に実施する農村公園公社の設立であった。

農村公園構想は1990年3月に発表された。村全体を公園のように美しく整備することを目標に置き、村が美しく整備されるには、農業が存続し発展することが重要であるとする。しかし今後産業として確立するには、先行き不安な農業が発展するためには、観光事業との連携が大切になるし、観光事業も振興するには美しい農村地域であることが前提にある。このように農業と観光との連携強化という趣旨が農村公園構想であるが、その構想が評価されて、各種事業が具体的に国・県から導入されたのである。

村ではさらに、美しい農村づくりへ向けて、景観条例の制定、新治型住宅の推進を図っている。こうした取り組みに対して、1996年度の全国の市町村の中から、唯一件である最優秀賞「毎日・地方自治大賞」として選ばれ表彰された。

(2) 農村公園公社の役割

新治村の農村景観の維持と農業と観光業との連携に果たしている財団法人農村公園公社の役割が注目される。現在では、全農家の4割が公社の直売所に参画している。農村公園公社の業務と農業との関係は次の通りである。

中核的施設は、豊楽館である。ここには農産物直売所、そば打ち体験所、食堂、土産品売店が設置され、貸自転車も用意されている。香りの家も同様である。農村公園公社は大豆とそばの栽培を農家に奨励して、市場より高く買い取っている。農村公園公社は、そのほかに年間に約15万人の利用がある「遊神館」経営している。

農産物加工施設は村が建設して、二グループに

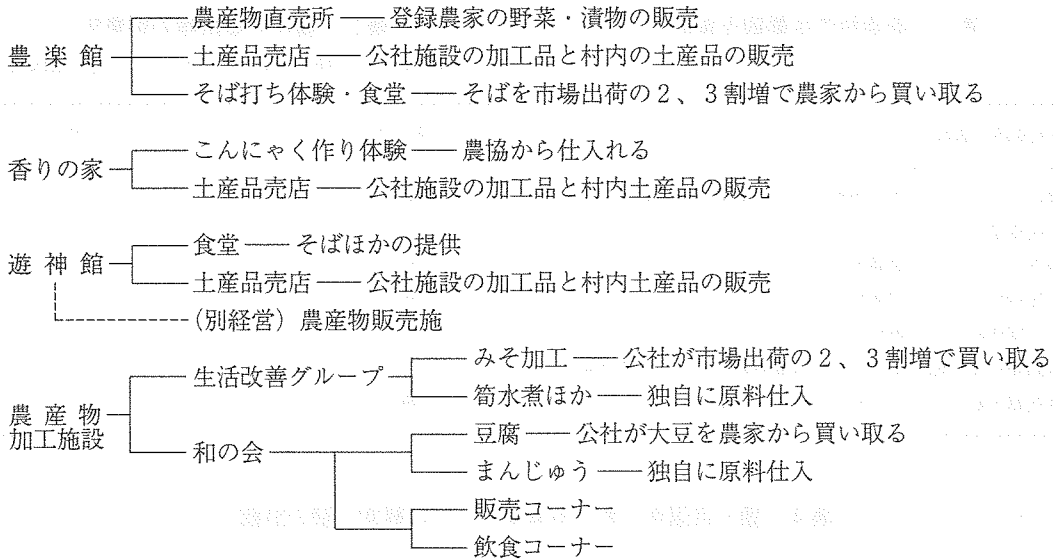


図2 農村公園公社の事業

よって、運営されている。山田¹⁸⁾の調査によれば、生活改善グループは、大豆を公社から割り当てられみそ加工をして公社に納める。光熱・水道・電気の代金と日当、グループの研究費は公社が支払う。タケノコ水煮・梅漬け・フキ佃煮は、自ら仕入れて加工して公社に卸している。

一方、和の会は、豆腐の大豆は、公社から卸され加工し、まんじゅうは原材料を独自に仕入れて製造している。販売は、併設されている販売コーナーと飲食茶屋「補助茶屋」で料理として出される。光熱・水道・電気代は和の会が支払い、さらにテナント料として売上げの10%を公社に支払っている。

4章 観光施設の課題と宿泊施設の盛衰

1. 観光施設の取り組み課題

表2にみるように、新治村の観光資源に誘致力のあるものは少ない。そのために、長い間、新治観光は、温泉目的の宿泊が中心で、その前後に周辺の他町村の観光施設に旅行者は立ち寄っていた。新治村でも滞在時間を伸ばそうと、外部資本による二つのゴルフ場と外部民間主導の第三セクターによる群馬サイクルスポーツセンターが開業

した。村も各種の施設を開発したが、それほど誘致力のあるものはなかった。そのなかで、既述の「たくみの里」と「遊神館」が新しい新治観光の局面を開いた。今後で注目されるのは、建設省のオートキャンプ場と新巻の「フルーツ公園」であろう。

以下においては、既存の主要観光施設の取り組み課題について述べる。

①高原千葉村 猿ヶ京温泉地とは赤谷川を挟んで、対岸の奥に赤谷集落に位置する。園内の環境と整備は申し分ない。地区の雇用効果に貢献しているが、早い時代の試みであっただけに、評判の高い川場村の「世田谷区民健康村」と比較すると、地域への開放がない。地元の人々が企画をして、千葉市民との交流を盛んにすることが望まれる。

②赤沢スキー場 村営である。傾斜が急で、コースは狭く、初心者向けではない。アプローチ道路も狭い。暖冬期に積雪がないなど、問題が多い。

③川手山森林公園 自然環境はよいが、アプローチ道路が狭い。利用者が少ないこともあって、施設の水準が低い。恵まれた環境を活かすためにも、早急に道路の整備をする必要がある。

表2 新治村の主要観光資源

観光資源・施設	内 容
平標山	谷川連峰の一つ、豊富な高山植物
旧三国街道	ハイキングコース
泰寧寺	県重要文化財
大庄屋役宅	県重要文化財
猿ヶ京関所跡	県史跡
三国路紀行文学館	若山牧水、与謝野晶子らの作品を所蔵
永井宿郷土館	永井宿の資料ほかを展示

表3 現存する旅館の創業年

→の後の数字は、経営者交替を考慮しないときの創業年

創 業 年	軒 数
1928－33	2
33－61	0
62－68	9→11
69－76	0→1
77	2
78－85	0
86－97	12→9

表4 猿ヶ京温泉における廃業ないしは経営交替の旅館

旅 館 名	創 業 年	部 屋 数	転 ・ 廃 業 年
見晴館	1888年頃	27	1995年 倒産。現在、競売にかかる。
相生館	1927	35	1997年 廃業。現在、競売にかかる。
みくに荘	1961	17	1965年 経営者交替。
湖山荘	1962	28	1999年 県から村へ移管。村は経営者を探している。休業中。
赤谷グランドホテル	1962	不明	廃業年不明、1982年頃たむら製作所保養所になる。
関所ホテル	1963	36	1987年 倒産。経営者交替。
上越観光ホテル	1965	22	1986年 経営者交替。1997年 旅館名称「芦の沢」に変更。
ホテル倉品	1973	8	1996年 経営交替。旅館名称「赤谷湖ホテル」に変更。

④群馬サイクルスポーツセンター 日本で有数の自転車競技ができ、バロセロナ・オリンピックの日本最終予選もここで開催された。しかし冬季に積雪があることと、雨天対策にトリックアート施設を開設したことから経営が悪化して、今後、経営の存続が危ぶまれている。

⑤たくみの里 「たくみの里」の成功はすでに述べたが、近年の問題として、たくみの家が須川宿1か所に集中しすぎているので、かつての分散を目的とした理想に近づけることと、外部のたくみが進出するにつれ、デザインの統一が見られなくなっていることがあげられる。

2. 猿ヶ京の旅館の盛衰

すでに見てきたように、三国温泉郷の5温泉地

では、猿ヶ京を除いた4温泉地は旅館の変動はない。ここでは、もっとも外部の変化に敏感に変動を余儀なくされた猿ヶ京温泉における旅館の盛衰を分析することにする。

表3は、現存する旅館の創業年をみたものである。一見して、赤谷湖が誕生して猿ヶ京温泉が全盛期を迎えた1962年から68年の間に、9軒、経営者が交替した旅館を含めれば、11軒が開業している。しかもこの時の旅館は、猿ヶ京のなかでは比較的規模が大きい20室を越える旅館であった。次の開業ブームは上越新幹線と関越高速道が開通した1986年から97年の期間である。この時期も新規に9軒、経営者が交替した旅館が3軒であった。しかしこの時期の旅館は、民宿や食堂から転換・兼業と、規模は10室未満と小さい。

次に、旅館を廃業ないしは経営者が交替した旅館をみたのが表4である。20室以上の規模の旅館の倒産ないしは後継者がいないために廃業、あるいは経営不振からの経営者の交替が生じた。

以上のように、猿ヶ京温泉の旅館は、外部環境の変化に栄枯盛衰をみせているのである。

ま と め

国道17号線の谷間沿いに発展していた新治村の観光が、1990年頃から、高台の農業地域にも展開され、現在では、ほぼ全域に観光地化が進行している。

時間的なながれからみると、それまで湯治場の雰囲気であった猿ヶ京の温泉地が、1955年から1961年にかけて大きく変貌した。1958年、相模ダムの建設に伴う赤谷湖の出現と、旅館が移転・新築をして猿ヶ京温泉となったこと、1959年の三国トンネルの開通と1961年の苗場スキー場の開場により、猿ヶ京地区への影響は大きく、猿ヶ京温泉は歓楽的傾向を強めた。同時に、猿ヶ京地区には苗場スキー場を利用する客の宿泊施設として多数の民宿が開業した。特に体育民宿村は全国的にも話題を呼ぶものであった。猿ヶ京地区は、1975年のオイルショックまで繁栄を続けた。

その後は、静かな時期が続いたが、次の大きな変革は、1980年代の後半であった。1982年の上越新幹線の開通を皮切りに、1985年の関越高速道の全通、1989年の総合保養地域整備法の重点整備地区の指定、さらには1986年から1990年にかけて整備が始まった「たくみの里」である。高速交通機関の整備に伴う恩恵は、東京圏への接近を容易にし、「たくみの里」、果樹園など農村地域への観光の波及をもたらしこととなった。しかし猿ヶ京温泉においては、団体旅行から個人・グループへの旅行の変化、大都市地域の旅行者を受け入れる旅館として、対応できなくなった旅館と、むしろそうした変化に対応した旅館と明暗をわけることになった。

湯宿はかつては新治村の商業、観光の中心地であったが、いまは静かな保養型の温泉地となっている。山中の1軒宿の法師温泉、川古温泉は、湯治の伝統を守りつつも、自然環境を生かして、保

養目的のあたらしい都会の人たちに対応している。新治村の観光は、全国の観光地間競争のなかで、新たな旅行者の変化への対応を模索しながら、つぎの時代へと進むのである。

注：

- 1) 山村順次「志賀高原観光開発史」徳川林政史研究所、1975、391 p.
同「観光地域論」古今書院、1990、334 p.
同「観光地の形成過程と機能」お茶の水書房、1994、336 p.
同「新観光地理学」大明堂、1995、270 p.
- 2) 淡野明彦「観光地域の形成と現代的課題」古今書院、1998、169 p.
- 3) 呉羽正昭：群馬県片品村におけるスキー観光地域の形成。地理学評論、64-12、pp.818-838.
同：リゾート型スキー場開発にともなう周辺地域の変容－安比高原スキー場の事例－。筑波大学地球科学系人文地理学研究グループ地域調査報告書、13、pp.139-152.
- 4) 浦達雄「観光地の成り立ち 温泉・高原・都市」古今書院、1998、190 p.
- 5) 有末武夫：上州新治村の地誌－1980年代後半の課題。群馬大学地理学会論文集、第13巻、1985、pp.54-73.
- 6) 溝尾良隆：群馬県新治村におけるリゾート開発計画とリゾート地域の形成過程。経済地理年報、第42巻、第3号、1996年、pp.18-32.
- 7) 持谷靖子編「猿ヶ京温泉史」あさを社、p51.
- 8) 湯本館社長、岡田太平氏談。
- 9) 「之（宮野を指す）と吹路、永井、合瀬と一村たり、貞治二年癸卯猿ヶ京と改称し」とある。（「新治村史料集 第二集」1958年、p16.）
- 10) 若山牧水「みなかみ紀行」崙書房、1971年、95ページ。
- 11) 以下の猿ヶ京温泉の歴史については、前掲7）に多くを負う。
- 12) 「温泉 湯島温泉（湯質鉄気にして沸騰す開始知り難し、元禄二年許を受け…）」とある（「新治村史料集 第二集」1958年、p17.）。
- 13) 「温泉 湯島温泉（…明治六年…浴場一ヶ所、旅舎一戸、浴客凡五、六百人）」とある（「新治村史料集 第二集」1958年、p17.）。
- 14) 法師温泉当主、岡本興太郎による。
- 15) のんき屋の主人に、NHKが宣伝してくれたことを尋ねると、NHKのテレビ番組でこの民宿の生中継をして、主人も出演したという。実は、この番組は1975年8月9日午前8時45分から9時35

分までのくらしのけいざい「民宿を考える」であり、偶然、著者もテレビ出演した。しかもこれは著者の初めてのテレビ出演で思い出の多いものであった。

16) 前掲5)

17) 前掲6)

18) 山田耕生「第1次産業の観光事業への活用と中山間地域振興」1997年度立命館大学大学院 文学研究科 修士論文

謝辞

本論文をまとめるにあたって、新治村企画観光課長河合進氏、総務課長阿部南衛氏にはたいへんお世話になりました。論文に登場する方々にはご多忙のところ、快くインタビューに応じて下さり、ありがとうございました。なお、インタビューの一部には、当時、溝尾ゼミ所属の学部学生滝谷昌弘君に協力して頂いた。以上の方々に対して、ここに記して、感謝の意を表します。

なお、本研究には立教大学観光学部研究費を使用した。